

## II 障害者支援施設 久喜けいわ

平成25年度事業計画に基づいて以下の事業を運営しました。

運営にあたっては、社会福祉法人としての責任や使命を自覚し、障害のある人を地域で支える拠点施設として、自立を促進する機能、セーフティネットの機能、福祉人材を育成する機能等、総合的に役割を果たすことに努めました。

本年度は、PCソフト（福祉見聞録）の運用が本格的になったので、利用者処遇の面ではケアマネジメントの充実、業務上ではPDCAサイクルの向上をめざし努力しました。職員の業務状況、利用実績・利用者の活動状況が日誌から確認できるようになり、支援の情報の収集・集積は充実しました。しかし、情報の整理に未熟さがあり、効果的な情報管理までには課題が残りました。そのなかで確認された支援上の課題への対応は、施設入所支援・生活介護・就労移行・就労継続B型の一体化により横断的な連携ができたので課題への理解がすすみ、利用者本人の意思にそえるようになり、意欲・意識の向上を伴う取り組みにつながりました。

### 【生活介護・施設入所・就労移行・就労継続B型共通事項】

#### 1 定員の充足

○現員と利用率

H26. 3. 31現在

事業名	定員	現員	利用率
生活介護	定員67名	現員71名	104.4%
施設入所支援	定員60名	現員60名	100.0%
就労移行支援	定員15名	現員13名	61.3%
就労継続支援	定員32名	現員32名	85.9%
短期入所支援	定員 6名		91.6%

- ・ 定員では、就労移行支援において平成24年度末に就職者が出たあとの補充が進まずに、定員に空きが生じました。このことは、就労移行への利用者のニーズの把握が十分にできなかったことにあります。また、支援センターとの方向性の不一致もあり、ケース会議とニーズのアセスメントの重要性を痛感しています。平成26年度の開始からは、特別支援学校の卒業生を受け入れるため、定員が充足されます。
- ・ 平成26年2月、女性利用者1名が腎不全のため入院先の病院で亡くなりました。終末期の支援として病院・家族と協力して体制を整え、本人ができるだけ安心できるよう配慮しました。利用者の高齢化への対応と終末期における看とりについて施設全体の高齢化とともに看取りについても、家族会と協議していますが、むづかしい課題があります。当面はその都度、当事者家族の個々の実情に応じて相談していくことが大切だと考えます。
- ・ 現在、施設入所支援を希望する利用者の待機は90名以上となっています。このことに応えるために私たちは、利用者の自立支援、地域移行をできるだけすすめながら、利用の循環を高めることが求められています。現状ショートステイの長期化があり、この循環が円滑にすすまない原因にも

なっていますのでショートステイの主旨にそった利用ができるよう支援センターと協働して他資源の利用をすすめる方策が必要です。

- ・地域移行先として欠かせないケアホーム（26年度からはグループホームとなる）の設置は、地域住民の理解、法的な規制、経済的な課題がありますが現在法人において準備をすすめています。
- ・施設としては、地域移行が可能になる自立支援が充実することが喫緊の課題でもあります。

## 2 支援体制の整備

職 種	人 数	備 考
施 設 長	1	
事 務 長	1	
総務課長	1	
事 務 員	5	障害者雇用 1 名（パソコン保守・点検）
清掃、営繕	2	
洗濯、清掃	2	障害者雇用 2 名
支援課長	1	
主 査	2	総務課 1 名 支援課 1 名
主任生活支援員	6	生活介護 1 名、施設入所 3 名、主査付主任 1 名、就労移行・就労継続 B 型 1 名
生活支援員	4 2	生活介護 38 名 就労移行 1 名 就労継続 B 型 3 名
職業指導員	3	就労移行 1 名 就労継続 B 型 2 名
就労支援員	1	就労移行
目標工賃達成指導員	1	就労継続 B 型
看 護 師	2	
管理栄養士・栄養士	2	
計	7 4	

## 3 生活介護・就労移行・就労継続B型の連携を強化した取り組み

- ・男性の入所利用者2名がホームへの移行を見据えて生活介護から就労移行支援にサービスを変更しました。就労移行支援では、現実の職場に近い条件があることから、本人たちも影響を受けて、積極的に他の利用者と協力しあう様子が見られています。
- ・支援の体制では、生活介護、就労移行、就労継続B型の職員が横断的に協力することで連携が定着しています。

## 4 PCソフト導入によるサービス提供体制と記録の充実

- ・PCソフト「福祉見聞録」の本格活用を開始しました。利用者支援、夜勤業務の実施状況、環境

面の巡視記録などが日誌上で確認できるようになりました。利用者の行動、体調に変化があっても情報の集約がしやすく速やかに対応できるようになりましたが無駄のない情報の整理と諸データの集積は課題です。

## 5 会議の充実

- ・職員会議は、職員のサービス状況、利用者の処遇にかかわる支援と健康、医療の連携や地域移行、危機管理、地域連携、ボランティアなど、施設に関連する情報を共有し、それらの課題点について方向性を検討しました。
- ・ケース会議では、必要に応じて対応困難ケースや緊急対応の検討をしました。他事業所や支援センターとも合同で会議を行い、地域資源の活用や他機関からの視点も取り入れた検討を行いました。まだ十分でなく今後の課題です。
- ・生活介護支援、就労移行支援、就労継続支援の横断的な連携を強めるための検討会議では、お互いの現状がわからないと連携がすすまないため、職員の交流研修を行いました。実習のメンバーや就労移行の体験利用の候補者なども検討会議で選考しました。

## 6 利用者へのサービス

(1) 個人を尊重した支援プランに沿って支援を実施しました。

- ・サービス管理責任者の指導の下、支援プラン作成しました。普段の慣れた生活から窺える状況だけでなく、環境の変化や本人の意欲などを想定した視点でアセスメントができるようになるためには、熟練を要します。継続してスキルアップに努めます。

(2) 権利擁護・倫理意識の徹底

- ・言葉で意見が言えない利用者の様子・反応に常に気を配り、表情などから気持ちを読み取るよう努めました。会話ができる利用者からは、様々な要望・意見を聞き取り、支援に生かすことに努めました。
- ・虐待防止策として、親しさのあまり利用者に対しての呼称が丁寧さを欠くとき、また、誘導・介助が丁寧でないときなどは職員間で指摘し合いました。職員の説明不足で利用者の行動がうまくいかないときは、その場でOJTを行いました。

(3) 看護師、栄養士による健康管理の充実

- ・看護師と協力し、早期の疾病予防・発見に取り組み、利用者の健康管理に努めました。
- ・感染症対策を徹底して、インフルエンザ、ウイルス性胃腸炎の拡大を防ぎました。インフルエンザ罹患者は1名のみで、対策は効果的でした。
- ・健康診断を6月、11月に行い、必要に応じて治療・経過観察を行いました。
- ・啓和会と久喜市歯科医師会共催のもと実施した歯科保健事業により、口腔ケアの取り組みが充実しました。
- ・管理栄養士と協力して、栄養ケアマネジメントとしてスクリーニング4回、アセスメント4回、ケア計画作成1回行い、食生活からの健康管理を実施しました。

#### (4) 余暇活動の充実

- ・クラブ活動ではボランティアの協力で順調に活動ができました。クラブ活動を通じて、社会経験の獲得、技術の向上、取り組みによる達成感、ボランティアや地域住民との交流など、多くの効果がありました。
- ・今年度のボランティアは、796名で、昨年に比べて約40名減りました。社会復帰のきっかけのためボランティアをしていた方が就職されたため、人数・回数が減っています。活動内容別の人数では、行事（361人）、クラブ活動（227人）、環境整備（122人）となっています。行事のボランティアが50名以上増えています。久喜けいわの支援はボランティアの協力で支えられています。施設としてこの協力が継続してもらえる努力が必要です。

### 7 職員研修

- ・主任が指導職員となりOJTを実施しました。特に、新任者に対しては2か月の目安で集中的に基本業務のOJT（食事、排せつ、服薬、着脱、入浴など）を実施しました。勤務で一人立ちした後の支援計画の作成や家族や関係機関への連絡、サービスに関する申請手続などの指導が十分ではなかったため指導内容、方法についてさらに工夫します。特に利用者本人の理解を深める「観かた」について具体的手ほどきが重要だと感じています。
- ・内部研修は、新任研修3回、テーマ別研修を3回行いました。テーマ別研修では主任向けのリスク研修、安全運転など、リスクに関連する内容を取り上げました。
- ・外部研修は、権利擁護、相談支援従事者、人事関係、リスク関係などのべ64人の職員が参加しました。施設内で事前研修を行うことで、研修に参加する職員のモチベーションが向上しました。

### 8 危機管理及びリスクマネジメント

- ・危機管理委員会で、地震・火災に風水害を加えた総合的な防災計画の作成を開始し、平成26年度に完成を目指しています。
- ・地震を想定して、全てのタンスの下に耐震マットを設置し、天袋の扉の鍵をつけ直しました。
- ・感染症対策での手洗い、消毒、加湿による予防策で感染拡大を防ぎました。降雪時の湯散布による除雪対策は効果がありました。
- ・預り金管理について要綱を改正し、管理方法を強化しました。

### 【生活介護・施設入所支援】

#### 1 基本サービスの充実を図り、生活の質を上げる

- ・食事、入浴、排泄、着衣等の支援に関して、医務や栄養士と連携をとり、個々の状態に合わせて支援を行ないました。・むせ込みや誤嚥に対して、より流動性の高いトロミ剤に変更しました。利用者ごとにトロミ剤の分量も決めて使用したところ、むせ込みが軽減しています。
- ・障害の重度化や高齢化に伴い、機械式の介護浴槽を設置しました。介護浴槽を設置したことで、安心して湯船に浸かれるようになりました。また職員の腰や体への負担も軽減しました。
- ・排泄が不規則な利用者に対し、毎日の細かな排泄チェックを行ない、排泄のリズムを把握に努め

ました。今までは夜間に便失禁があった利用者が、便通剤の時間を変更し、起床後に排便が出るようになりました。

## 2 安全、安心な生活環境作り

- ・トイレ・浴室の手すりや椅子を使い易いように改修しました。無理なく手が届くようになり、安全に移乗や立位が保てるようになりました。
- ・地震が起きても、利用者に家具が倒れないよう居室の模様替えを行ないました。また、耐震マットや耐震ポールにより、家具の転倒を防ぐ対処を施しました。
- ・夜勤業務として、施設、におい、危険箇所のチェックなどを行い、異常のある箇所については、朝会で報告し速やかに改善するよう努めました。

## 3 意思決定の支援

- ・本人と話し合う時間を増やし、本人の意向や要望を聞くことに努めました。話し合う中で、本人の悩みや望んでいる事が明確になり、利用者本人から提案や意見が出されるようになりました。
- ・5月、6月、11月と3回自治会を開催し、意見を利用者の朝会等で報告しました。また自治会のメンバーが埼玉県発達障害者協会の利用者部会に参加し、他施設の利用者と意見の交換を行い、交流を深めました。
- ・月一回の給食会議に利用者が参加し、栄養士・委託調理業者・職員と共に話し合い、活発な意見交換が出来ました。

## 4 他害のある人への支援

- ・自分の気持ちを上手く伝えられず、些細なことから他者に八つ当たりや暴言暴行をしてしまう人から子どもの時から現在まで永い施設生活のため生活全体がマンネリ化し、弱いものいじめや突き飛ばしが常習化している人、他の利用者がやさしくされるのを見ることで不穏になる人など、さまざまな理由が他害の原因になっています。対応はまず丁寧に気持ちを聞くことから始まり、ニーズを受けとめて、場所（環境）を変える、人を変える、支援内容を変える、本格的な就労を試みる、他の事業所に留学してもらう、家族との交流を緊密にするなどの方策で改善していくことが有効でした。

## 5 高齢化、重度化への支援

- ・体力に配慮して日中時間の入浴を行いましたが、入浴後に眠ってしまうことや、通院のために入浴できない状況が生じ、予想したような生活のゆとりはできませんでした。入浴を夜に戻し該当者だけ入浴を一日おきにする配慮をしたところ、体力の余裕がでて、活動に参加できるようになりました。
- ・呼吸、食事、排泄、発熱、発汗など基本的な健康の異常について、注意深く観察を行いました。食事や排泄の介助は丁寧にいき、便秘の人には腹部マッサージや運動を取り入れました。呼吸器疾患の利用者には吸入処置を取り入れたところ、痰が出しやすくなり呼吸が安定しました。
- ・リハビリ的な活動として、スクワットや腹筋、歩行訓練を行いました。ボーリングゲームなど遊

びながら体を動かす取り組みは利用者に好評でした。

- ・いざという時に助けてもらえるよう医療機関との連携を日ごろから密にしておくことが最も大切でした。

## 6 罪を犯した障害者への支援

- ・定着支援センターの紹介で受け入れた利用者が、久喜けいわを利用し始めてから二年が経過しました。施設の生活にも慣れ、順調に過ごしていますが、時折本人の不満の訴えが続き、職員が夜まで付き添う支援を必要とすることがありました。
- ・まず本人と向き合い、取り組みの達成感が得られるよう常態化していた夜尿に注目し「本人が心地よく過ごすための支援」として、時間を決めて声掛けをする取り組みを行うようにしました。
- ・その支援の効果が本人の自立のためであることを伝え、実際に取り組む中で、職員との信頼関係、自主性が見られるようになっていきます。
- ・また、好きな音楽を通してやりがいを持てるように、音楽クラブに参加してもらい、ボランティアとの交流や、大きな舞台で演奏することにより、新たな目標が出来ています。
- ・本人にとって今年度は、人との相互の関係の中で生じた関係性や取り組みの充実により良い変化のきざしが見られましたが、来年度は、人の役に立つこと、働いて報酬を得ることが目標です。

## 7 地域生活を希望する人への支援

- ・地域生活に必要な、ひとり暮らしのスキル（挨拶 身だしなみ 言葉使い 金銭管理）のプログラムを練習し、10月と11月の2か月間、男性棟利用者2名がホームの体験として日中の食事利用、現実的な入浴など研修の形で日中のみ利用させてもらいました。食事を残していた利用者が、ホームでは食事を残さず食べるようになるなど、良い結果がでていきます。次年度は本格的に地域移行への支援に、力を入れていきます。
- ・ケアホームと連携して、「あじさいの会」やホームとの合同外出や創作活動を行いました。今後ホームの利用者から生活の様子を話してもらうなど、入所利用者がホームでの生活に興味・関心を持つような支援を取り入れていきます。

## 8 地域生活者、在宅障害者のバックアップ

- ・緊急な事態（台風、夜間通院）が予測または起きた時に、ホームと協働で利用者の安全確保に努めました。
- ・家を飛び出してしまう、家で暴れてしまう、家族が病気がちである、などの問題を抱える在宅の利用者が緊急的にショートステイを利用しました。休日の通所がない日にショートステイのニーズが高く、定期的なショートステイを行なったところ、家族の介護負担が軽減しています。
- ・ショートステイの使用状況を見ると、親の高齢化や離婚により支援力の低下したことで短期入所の希望するケースが多く、将来的に施設を利用したいために練習を兼ねての利用は長期のショートステイが固定化しているためほとんどできませんでした。

## 【就労移行支援・就労継続支援 B 型共通事項】

### 1 受注作業や職場実習におけるアセスメントの実施と仕事の適性評価

- ・受注作業や職場実習を通じて、作業能力（理解力、適性、作業態度など）、社会性（挨拶、言葉遣い、報告・連絡・相談、協調性など）をアセスメントしました。
- ・アセスメント結果をもとに仕事への適性を評価し、支援センターと共働しながら、本人に合った職場の開拓に努めました。支援員とセンター担当相談員の見解が異なる場合があり関係者を招集する会議で意見の統一を図る場合もありました。

#### 就職先一覧

会社名	仕事内容	就職者	所属
㈱吉野家東京工場	食品加工	男性 (20 歳)	就労移行
	清掃	女性 (27 歳)	就労移行
㈱流通サービス	荷積み作業	男性 (33 歳)	就労移行
アイワイフーズ㈱	食品加工	女性 (30 歳)	就労移行
合計		4 名(男性 2、女性 2)	移行 4 名
就職者平均年齢		27.5 歳	

### 2 利用者の利便性の向上

- ・自転車で通所する利用者のための屋根付き自転車置き場の設置について、来年度内の実施を目指します。

## 【就労移行支援】

### 1 就労支援センターとの協働による就労支援の強化

- ・就労支援センターと連携し、就労支援、職場開拓を行ないました。
- ・4 名が就職し、職場定着に向けた巡回支援をジョブコーチと連携して行ないました。これまでの就職者 20 名以上が離職せずに職場定着しています。
- ・施設内作業、企業内実習、委託訓練とステップアップを図った後、ハローワーク等での求人探しや障害者合同面接会にて就職活動を実施しました

### 2 就労に向けた利用者支援

- ・仕事に必要な社会性（挨拶、言葉遣い、身だしなみ、作業態度など）の指導を行ないました。
- ・企業実習や委託訓練を通じて、通勤訓練を実施しました。
- ・企業内実習、委託訓練、トライアル雇用を積極的に活用し、より実践的な職場体験を積めるように支援しました。

### 3 新規利用者の開拓

- ・施設入所支援、支援センター、特別支援学校との連携により、新規利用者を受け入れました。自宅で数年引きこもっていた経歴がある利用者に対しては、半日での利用から始め、できるだけ

同性の職員がかかわるようにするなど、丁寧に導入を行い、本人の状態をみながら通所のリズムを整えていきました。

## 【就労継続支援 B 型】

### 1 定員増員と定員充足にむけた利用調整

- ・利用希望が多い継続支援B型について、32名に定員を増員しました。生活のリズムが整わず休みがちの利用者がいたため、家族の介護のため長期で休む利用者がいたため、利用率は90%を下回りました。

### 2 日中活動の充実

- ・作業を通して、利用者の作業能力、意欲の向上を図りました。
- ・4箇所での施設外実習を行いました。食品の包装不良品のパッケージを剥ぐ作業、緩衝剤の袋詰め作業、公園清掃、リサイクルトナーの分別作業を行ないました。
- ・実習を通じて、大きな声で挨拶すること、報告・連絡・相談の徹底、作業技術の向上、協調性の獲得を図りました。

### 3 受注作業の確保と作業工賃の向上

- ・作業工賃の向上を目指した結果、平均工賃は12,504円で、昨年度(12,066円)より増えました。新たに公園清掃、リサイクルトナーの仕分けの実習を請け負ったことで工賃が増えました。
- ・新たに製造した新商品の餃子販売は、イベントでの焼き餃子販売と、鷺宮親の会と久喜市あゆみの郷が運営する「キッチンこすもす」で販売を行っています。評判は上々で、来年度、販売を拡大していきます。

平均工賃の推移(過去3年間)

年 度	平均工賃(円)	工賃総支給額(円)	支給対象延べ人数
平成 23 年度	9,494	3,484,169	367 人
平成 24 年度	12,006	4,162,942	345 人
平成 25 年度	12,504	4,401,292	352 人

### 4 けいわ味噌の品質改良と販路の維持、拡大

- ・地域住民との協働による、地元で根ざし手づくり感を生かした復刻版味噌と、学校給食等に卸している従来版味噌の2品目を生産・販売しました。
- ・復刻版味噌の高級嗜好品化、従来版味噌の大量生産化を検討し、購買層・販路の拡大を目指すことが課題です。
- ・大量生産化に伴う醸造保管倉庫の整備が必要です。

## 【重点事項の達成状況】

- 1 PCソフト導入により、支援面ではケアマネジメントの諸過程が、業務面ではPDCAサイクルのマネジメントが向上するよう努めました。
  - ・職員の業務状況、利用実績、利用者の活動内容などが日誌上で確認できるようになり、情報量が増え、他の利用者や環境面、職員の勤務状況などとの照らし合わせがスムーズになり、対策のポイントが導きやすくなりました。
  - ・書面だけでなく言葉による報告・連絡・相談の充実には、まだ時間がかかると思います。
  
- 2 基本サービスの充実のために業務を見直しました。
  - ・看護師、栄養士と連携し、基本的な食事、排せつ、入浴、睡眠について課題がある利用者の観察を集中的に行い、介助方法、時間、道具の変更などについて見直し、対応の改善を図りました。
  
- 3 生活介護・就労移行・就労継続B型の連携した取り組みを行ないました。
  - ・連携した取り組みによって活動内容、支援に広がりが見られました。また、利用者の取り組みに対する姿勢が上達し、一つの取り組みから生活が大きく変化する効果が見られました。
  
- 4 実践的演習を通して、介護スキルの向上に努めます。
  - ・浴室や手すりの改修工事後、移乗、介護の方法について見直しました。利用者の立つ位置、手すりの持ち方など基本的な事柄から確認することで、新任者への指導内容も整理がされました。
  
- 5 ケアマネジメントの手法をできるだけ多くの職員に学んでもらいました。
  - ・アセスメント、プラン作成、モニタリングの一連のサイクルは支援員に理解されていますが、何よりも利用者の人となりを理解する「観かた」の習熟に重点をおいて、それぞれの過程の精度を上げていくことが課題です。そのために、プラン作成を繰り返し熟練すること、プラン検討会議で多角度からの意見をプランに組み入れること、サービス管理責任者のスーパーバイズ機能を高めていくことをさらに進めます。
  
- 6 今までの体験から、危機管理の体系化と強化を図りました。
  - ・除雪、感染症対策では、被害の拡大を食い止め非常に大きな効果がありました。
  - ・危機管理委員会で作成中の総合的な防災計画の作成・実施に協力していきます。
  - ・預り金の扱いについての管理を強化しました。
  
- 7 報連相を充実するために、連絡体制を見直しました。
  - ・連絡体制について、できるだけ具体的な内容・方法を整備し、担当者同士がお互いの業務を理解しながらすすめることで効果があがりました。特に、総務課と支援課の連携では、実績集計や預り金業務の連携がスムーズになりました。
  - ・全般的には、これで良いとはならず続けての努力をしていきます。

8 ケアホームの体験を通して、地域生活移行の推進に努めました。

- ・男性利用者2名がホームの体験利用を行いました。体験の様子を聞いた他の利用者から「私もホームに行けるようになりたい」という意見もでています。
- ・次年度は、本格的に地域移行への支援に力を入れていきます。